

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370271

研究課題名(和文) アメリカン・ルネサンスの思想史的背景

研究課題名(英文) The American Renaissance and its Background in Intellectual History

研究代表者

吉国 浩哉 (YOSHIKUNI, Hiroki)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：50600186

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、19世紀のアメリカ文学、とりわけアメリカン・ルネサンスとよばれている1850年前後の文学動向(ポー、エマソン、メルヴィル)を、ヨーロッパ大陸における思想史(とくにカントからロマン主義へといたるプロセス)との関連から読み解くことが試みられた。その際、これら異なる二つの伝統を結びつける焦点となったのは、「自由」という哲学概念と「小説」という文学ジャンルである。ヨーロッパに端を発するその両者を、アメリカ作家たちは後から「遅れて」受容したのだが、そのことによって彼らは後発者の立場からそれらに対して批判的に応答したということが、個々の作品分析を通じて明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This research project attempted to read the American Renaissance in relation to the European intellectual history--especially to the transmission of thought from Kant's critical philosophy to romanticism--focusing on the relationship between the philosophical idea of freedom and the literary genre of the novel and also on the transformation of the former by being linked to the latter. By closely reading the texts of the American Renaissance, it has become clear that because of the American authors' belated reception of the idea and the genre, which had already been popularized in Europe when they started writing their works, their responses were critical: they read the combination of the two as banality. Rather than totally abandon the idea of freedom, however, they recovered the freshness of the idea of freedom by reinventing a new way to manifest the idea in the sensible sphere of experience.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学 比較文学 ロマン主義 小説 個人主義 ハーマン・メルヴィル イマヌエル・カント

1. 研究開始当初の背景

概して、文学者による哲学の取り扱いとは異なる誤解とされることが多かったが、19世紀のアメリカ文学に対してもそれは例外ではなかった。この時代の作家たちも哲学、とくに当時最先端とみなされていたカント、ヘーゲルやドイツ観念論を参照することが多かったが、これまでの研究ではそのようなアメリカ作家たちによる哲学の利用は、彼ら自身の宗教的または美学的アジェンダに寄与することを主たる目的とした牽強附会の理解であるとされてきた。

しかし、20世紀中盤以降、そのような「誤解」という判断の、その哲学的基盤自体が疑問に付されることになった。これらの判断は新カント派的なカント理解に基づいていたのだが、ヴァルター・ベンヤミン、フィリップ・ラクー＝ラバルトやジャン＝リュック・ナンシーらによってカントとロマン主義との関連が再検討されて以降（あるいは、大きな流れとしてはハイデッガー以降）、もはやそれだけが、唯一の正しいカント理解ではなくなったのである。

そのような哲学、思想研究における動向の変化を背景として、ふたたびアメリカン・ルネサンスの作家たちとヨーロッパ大陸の（とくにドイツの）哲学との関係を再検討することを目指したのが本研究である。

2. 研究の目的

本研究では、19世紀のアメリカ文学、とりわけアメリカン・ルネサンスとよばれている1850年前後の文学動向を、ヨーロッパ大陸における思想史（とくにカントからロマン主義へといたるプロセス）との関連から読み解くことが試みられた。その際、これら異なる二つの伝統を結びつけたのは、「自由」という哲学概念と「小説」という文学ジャンルである。

3. 研究の方法

19世紀の大陸思想とアメリカ文学との関係に関する先行研究としては、Henry Pochmann の *German Culture in America* や Leon Chai の *The Romantic Foundations of the American Renaissance* などがあげられる。しかし、これらの研究は網羅的ではあるが、ややもすれば両者の参照関係を特定することのみに終始しているようにも見える。その一方で、René Wellek の *Confrontations* のように、アメリカ文学における大陸思想の実質的な意義を検討した研究もあるが、それはアメリカ文学における大陸思想の理解とは、単なる誤解か恣意的な歪曲でしかないという（新カント主義的観点から下された）否定的な評価であった。本研究は、これらの先行研究の成果をふまえつつも、「自由」と「小説」という二つのトピックに焦点を絞ることにより、アメリカ作家による大陸思想の理解とその文学的表現のなかに

積極的な意義を見いだすことを試みた。いわば、それを創造的な誤読として読むのである。

この目的ゆえに、本研究は、啓蒙思想からロマン主義へといたるヨーロッパの思想動向をふまえつつ、アメリカン・ルネサンスにおける「自由」という哲学的概念と「小説」という文学ジャンルとの関係性を分析することとなった。「小説」というジャンルがヨーロッパにおいて勃興し、すでにその隆盛を極めた後に、アメリカ作家たちが、いかにして「小説」を書こうとし、「小説」について考え、同時にそのことが「自由」の問題にどのように関わっていたのかを考察したのである。そして、本研究の対象となったアメリカ作家は、ポーとメルヴィルであり、そして小説家ではないが文学理論家としてのエマソンである。そのほか、カントにおける自由の概念を検討するためにポール・ド・マンの崇高論が考察され、ヨーロッパの「小説の理論」も、アメリカ小説との比較を念頭に検討された。

フィリップ・ラクー＝ラバルトやジャン＝リュック・ナンシーなど、多くの論者が主張しているように、ヨーロッパのロマン主義はカント哲学に対する応答として勃興している。カントは、因果関係によって支配された経験や知識の世界の彼岸として、自由という概念を提示した。つまり、人間を特別な存在として、機械や動物と区別する理念がまさに、「自由」なのである。しかし同時に、このようなカントの定義による「自由」は、経験や知識の外部であるがゆえに、それを認識することは不可能である。この不可能性こそ、逆説的にロマン主義は「文学」の意義を見いだすことになる。すなわち、哲学や科学が自然や社会のみをその知識の対象とし、そのような知識には還元できない説明不可能の領域、つまり自由に関しては沈黙せざるをえないのに対し、「文学」はまさしくこの自由を呈示 *Darstellung* することが可能なメディアとして、新たな栄光を担って誕生したのである。そして、（カント本人は「小説」を批判していたのにもかかわらず）その文学の中でも、「小説」というジャンルが特権的な地位に即くことになる。なぜならば、小説の主人公は社会の慣習や法に従う普通人でありつつも、物語のある時点ではそのような慣習や法から独立して自由に決断し行動するからだ。本研究の出発点となったのは、アメリカ作家たちも共有していたであろう、ロマン主義運動から勃興したこのような「文学」の理念である。

伝統的に、アメリカ文学の特異性が問題となるとき、小説とロマンスとの違いについてよく語られている。つまり、アメリカ作家たちは、小説ではなくロマンスを書いているとされているのである。たとえば、ホーソーンは「人の心の真実」を表すのには、小説よりもロマンスの方が適していると述べた。ヘンリー・ジェームズも、そのホーソーンに関し

て、アメリカで小説を書くことの困難を指摘し、その理由を「歴史や習慣の蓄積」の欠如に見ている。しかし、別の見方をすれば、彼らは、厳密な意味で小説を書くことの、つまり、自由をその真の姿で表現するような小説を書くことの困難を何らかの形で感知していたということでもある。

メルヴィルとエマソンをその典型として、これらの作家たちは、「自由」の理念ゆえに批判もされた。Wai-chee Dimock が指摘するように、「自由」の概念がアメリカ個人主義のイデオロギーとして機能してきたからだ（*Empire for Liberty*）。これに回答して、たとえば Donald Pease などは、アメリカン・ルネサンスの作家自身による「自由」という概念の批判や、彼らの共同体主義への傾向を見いだそうとする研究者もいる（*Visionary Compact*）。しかし、本研究が目指したのは、これらの作家が徹底的に自由の理念の信奉者であるということ、それと同時に、彼らの考えている自由とは、個人主義や革命神話へと変質してしまった「自由」とも異なっている、ということを示すことであった。

4. 研究成果

研究成果は、思想的側面（あるいはジャンルの側面）と文学的側面（あるいはテキストの側面）の二点から成り立つ。思想的側面としては、「自由」という哲学的理念と「小説」という文学ジャンルとの関連がまず検討され、それとともにこのカント的な理念が小説というメディアに取り込まれることによって引き起こされたその変化・変質が分析された。文学的側面としては、以上のように「自由」と「小説」がロマン主義において結びつき、その連関によって「自由」の理念も変質・変容していったその後から、後発的にアメリカン・ルネサンスの作家たちがその作品を書き始めたという事実に着目し、彼らがこの「自由」と「小説」（あるいは「自由」の呈示）という連関およびその変化にいかに対応したかが分析された。

（1）思想的側面：自由のイデオロギー化としての小説（ド・マン論、「小説の理論」論、崇高論）

ベンヤミン、ジャン＝リュック・ナンシー、フィリップ・ラクー＝ラバルトらが論じているように、「ロマン主義」がカント哲学への文学的応答であり、「自由」という理念を感性的なかたちで表現（呈示）することがその課題であったとすれば、それは「自由」を理解不可能なもの「として」表すことによって達成されることになる。つまり、「小説」においては、物語の進行上のあるポイントにおいて、主人公が決定的な行為への決断を下すが（たとえば『クラリッサ』において、ラブレイスの求婚を完全に拒否する場面、『ある貴婦人の肖像』においてイザベル・アーチャーがオズモンドと離婚せずに生きることを

決意する場面）、小説の中では彼らがそのような決断へといったその理由ないしは原因が明示的に描かれることはない。なぜならば、その理由をはっきりと理解可能なかたちで提示してしまうと、それは決断へいたるプロセスを、社会的ないしは心理的な因果関係に当てはめることになってしまい、その主人公特有の個別性や主体性を無化し、結果として彼らを、原則的には社会慣習や生理的欲求に従って行動する、ごく一般的な（特徴のない）人物として描くことになってしまうからである。それを避けるためにも、決定的な行動へいたるその理由や動機は、小説においては神秘的な謎「として」、理解不可能なもの「として」、言い換えればそれは一切の外的な要因からは独立した自由「として」表現されなければならないのである。

この意味で、ナンシーやラクー＝ラバルトによる議論とは若干違った意味ではあるが、カント哲学がロマン主義以降のヨーロッパ小説にとって本質的なものであるとすることができる。そして、これもカント哲学の衝撃に対するひとつの応答であると言えるが、しかしそれは、カントの提出した課題、つまり自由の理念の呈示という問題に対する解決であるということではできない。すなわち、このように、いふならば小説化された自由の理念は、「として」のかたちに変換されて対象化された時点で、理念としてのラディカルさを失っている。「理解不可能なもの」からわれわれは、なんらかのイメージを理解することが可能なものであり、「理解不可能なもの」はそれ自体として理解することが不可能であるわけでは決してない。小説の主人公たちがとる「理解不可能」な決断が理解不可能なのは、あくまでも物語内の周囲の登場人物たちに対してであって、読者の視点から見ればそれは十分の理解可能であり、賞賛や非難などの価値判断の対象にさえなるのだ。しかし、自由が理解不可能なもの「として」理解されることによって、そこにあった、経験や知識に対する異質さは決定的に縮減されているのである。

さらにいえば、このように理解不可能なもの「として」、小説の主人公の中に確立された「自由」は、小説というジャンル自体の隆盛に伴って、それ自体が広く社会に普及したイデオロギーとなった。つまり、人間であるかぎり、その心理の中には理解不可能なものが孕まれており、その意味において個人はみな違うと考えることが、それ自体で一般的なものつまり常識一となったのである。言い換えれば、個人は自由であるので一小説の主人公のように一ときどき理解不可能な行動をとるといふ考えそれ自体が、社会の中で広く共有された知識になってしまったのである。それは自由のイデオロギー化であり、あるいはたんに個人主義と言ってもいいだろう。

ポール・ド・マンによるカントの崇高論は、このようなカントから個人主義（あるいは

「主体」の形而上学にもとづく「美学」への流れには回収しきれなかったものの残滓を、カントのテクストそのものの中に見いだそうとした試みであったと言えるだろう。ド・マンにいわせればカントの読者たち（典型的にはシラー）は、本当はカントを読んでいなかったのであり、カントが崇高と呼ぶものは、理解不可能なもの「として」想像されるものではなく、その想像力を文字通り凌駕するものとして人間的経験とは相容れないものなのである。ド・マンの崇高論はそのようなラディカルさをカントの哲学に取り戻そうとした試みである。

そして、このようなカントによる崇高は、リオータルによれば「熱狂」を通じて「小説」にその表れを見いだすことになる。実際、カントは自身の歴史哲学的考察を何度か「小説」と呼んでいたのである。ここから、自由が個人主義とは直接につながらない「小説の理論」の可能性が見えてくる。あるいはまた、ベンヤミンの「物語作者」は、「物語」を（とくにルカーチを念頭においた）「小説」と対比させていたが、それは、孤独な「個人」の時代の叙事詩的表現としての「小説」とは異なる、もう一つの「小説の理論」の構想として読むことが可能である

(2) 文学的側面：個人主義批判としてのアメリカン・ルネサンス（「バトルビー」論、ポー論〔学会発表〕、エマソン論〔学会発表〕）

カント哲学の応答としてのロマン主義がドイツで興ったのが1800年頃とすれば、アメリカン・ルネサンスの作家たちが活動した1830年代から50年代にかけては、ヨーロッパ大陸のみならずアメリカ合衆国においても、自由のイデオロギー化あるいは個人主義の普及はすでにかなりの程度まで進展したと考えられるだろう。そして、これらアメリカン・ルネサンスの作家たちが、そのようにすでに小説化されてしまった自由に対し何らかの違和感を持っていた、あるいはイデオロギーのイデオロギー性に感じていたと想定するのも全く不可能なことではない。すでに19世紀前半におけるジェーン・オースティンやディケンズ、スタンダールやバルザックによる小説の隆盛を経験した後で、そこで前提とされている「個人」の概念に対して後発のアメリカ作家たちが何らかの疑念を抱いたと考えるのも不自然ではないからである。

ロマン主義が引き起こしたその帰結が、小説を通じたカント的な自由の理念のイデオロギー化であり個人主義だったとすれば、時間的にロマン主義に遅れてしまったアメリカン・ルネサンスの作家たちは、結果的に一意識的であれ無意識的であれ—この個人主義の批判となるような作品を書くことになった。たとえばポーは「黒猫」や「天邪鬼」において、突発的に原因不明の行為に走る人

物たちを描いたが、彼らはそれ以前の小説の主人公のようにその理解不可能な行為によって読者の共感を誘ったり批判を招いたりはない。ポー小説の主人公たちは、その行為によって自分自身も意図しない自らの生命の破壊を引き起こすので、「なぜ」彼らがそのような決断をしたのかを、目的の観点から因果づけることが不可能なのである。しかし、これこそがカント的な意味での「自由」の理念の呈示であるというわけではない。そうではなく、ポーによる小説の個人主義に対する批判は、「理解不可能な行為」というこの個人主義の論理的な帰結を、文字通り描くことによって、その真実を暴露したアイロニカルな姿勢にある。「自由」な小説の主人公の末路は幸せな結婚ではなく、殺人の罪で（反逆者の栄光ではなく）狂人としての恥辱の中で処刑されるのである。

あるいは、カント哲学のアメリカ的解釈とされる「超絶主義」のエマソンであれば、「読むこと」の問題が、このカント的な「自由」の問題系に関わっている。すなわち、自然の法則による因果関係からは独立した出来事が起こるのがエマソンの考える「読むこと」ないしは読書なのである（「アメリカの学者」）。このエマソンの議論は、そのような出来事としての「読むこと」が自分自身に対して起こることを基本的には「待つ」という受動性において、典型的な小説の主人公が持つ（個人主義的な意味での）「主体性」とは全く異なっている。

そして、小説的な主人公の「主体性」のアンチテーゼであるような作品がメルヴィルの「バトルビー」である。ひたすら文書のコピーを繰り返す、その後はただ壁を見つめるだけの生活を送り、最終的には牢獄で餓死してしまうバトルビーには、「自由」などというものは全くないように見える。実際、ある箇所では彼は事務所に据付の家具と同一視さえされるのである。しかし同時に、バトルビーにはほとんど超自然的ともいえるべき深遠さが備わっている。それゆえ、彼の雇用者である語り手もバトルビーに対しては暴力的な手段に訴えることができない。このように、寓話的ないしは機械的とも呼ばれるべき平板さと超自然的・超人間的な深遠さがバトルビーにはある。このように相反するモーメントが重なり合うのがバトルビーという人物であり、徹底的な意味でその行動の動機や理由を説明できないという意味では「自由」なキャラクターということが出来るが、この作品をもってしてもカント的な理念の感性的な呈示とすることはできない。「として」の形式による理解はここでも可能だからだ。それに対して、メルヴィルが行ったのは、自由な存在としてのバトルビーそのものを描くのではなく、そのような存在と遭遇した語り手の経験を描くことである。このような手法により、読者は自由を直接目撃するわけではないが、語り手の経験を

通して個人主義的な「個人」とは違ったかたちでの存在のあり方を垣間見ることができるようになる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

Hiroki Yoshikuni, “Kant with Bartleby: A Fate of Freedom,” *Nineteenth-Century Literature*, Vol. 71, No. 1. 2016, pp.37-63. 査読有、DOI: 10.1525/ncl.2016.71.1.37.
吉国浩哉「生起、移行、翻訳：あるいはポール・ド・マンのイデオロギー批判」、『表象』第8号、査読有、2014年、158～172頁。

〔学会発表〕(計6件)

Hiroki Yoshikuni, “The Raw and the Dry: Walter Benjamin’s ‘The Storyteller’ and Theories of the Novel,” 招待講演 2016年3月29日 ニューヨーク州立大学バッファロー校(アメリカ合衆国バッファロー)

Hiroki Yoshikuni, “Providence of the Plot: On Marxist Theory of the Novel,” Northeastern Modern Language Association, 2016年3月25日 ボルティモア(アメリカ合衆国)

Hiroki Yoshikuni, “The Sublime and the Novel,” American Comparative Literature Association, 2016年3月18日 ケンブリッジ(アメリカ合衆国)
吉国浩哉「アメリカン・ルネサンスの美学—ロマン主義の運命」日本英文学会 2015年5月23日 立正大学(東京都品川区)

Hiroki Yoshikuni, “Romanticism in Transit: the idea of “America” in the American Renaissance.” American Comparative Literature Association, 2015年3月27日 シアトル(アメリカ合衆国)

Hiroki Yoshikuni, “The Knell of Our Welfare, the Chanticleer-note to the Thing: Kant with the American Renaissance.” Rodolphe Gasché Seminar. 2014年11月25日 東京大学 駒場キャンパス(東京都目黒区)

6. 研究組織

(1)研究代表者

吉国 浩哉 (YOSHIKUNI, Hiroki)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：50600186